

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A : よくできている B : 概ねできている, C : あまりできていない, D : できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心豊かでたくましい子	もっとやってみよう ～心も体も動き出す～	「もっとやってみよう」の思いが芽生え、これまでの経験をつなげ、遊びを展開している	継続・発展する遊びが多くみられてきた。工夫・試行錯誤する姿が増えている。自発的・協力的遊びが育っている。	A	A	・保育参観の様子から、先生方が育ちのビジョンを持ち、意図をもった目的・手段があることがよくわかった ・子どもたちが個の遊びが充実し、友達とのかわりに興味をもってきているという成長が伺えた ・異年齢交流は、無理して行うのではなく、行事を精選し、自然発生的なかかわりを大事にするとうい、小学校でも目指す姿は同じである	・子どもの興味・経験をつなぎ、遊びを継続・発展させる環境として、前日の姿を踏まえた環境作りと翌日につながる遊びの終わり方を意識する ・年齢に応じた保育教諭のかかわりとして乳児は、ヒト・モノ・コトに気づくためのかわりを、幼児は、伝え合いの質を高める援助を行う。
		友達と思いを伝え合い、共感したり自分とは違う意見を聞いたりすることで、様々な考え方があることを知る中で、友達の良さに気づく	「自分の思いを伝える力」と「友達の気持ちに気づく力」を育てる保育が丁寧に実践されている。	A	A		・目指す保育者のかかわりとして、仲立ち・見守り・言葉の橋渡しを行い、「相手の思いを受け入れる」「思いを伝え合う」ことに関しては、今後も継続的な援助が必要である。
		異年齢の友達と場を共有したり、一緒に遊ぶことを繰り返す中で、思いやりや憧れの気持ちを持ち、自分も「やってみようかな」心と体が動き出し、様々なことに挑戦する姿が増えている	活動内容やねらいを園全体で共有し、子どもたち一人一人の遊びを充実することと安心安全な異年齢交流について再考し、子どもたちが互いに育ち合う場を大切にしていける。	A	A		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どもの発達や経験などを十分に把握し、発達のつながりやその子らしさを職員間で共有し、一人一人に合わせた適切な援助を行っている	子どもの発達を丁寧に捉えた保育が実践されている。職員間での認識の差により、対応の統一が難しい場面があるが、パート職員にも丁寧に情報が伝えられ、共有して保育ができている。	A	A	・外国籍の子や特別に配慮が必要な子は、小学校にもいる。小学生になると、互いの違いも子どもがよく理解し合い、仲良くしている。良さや違いを認めるために身近な大人がモデルになっていけるようにしたい	・全職員で子どもの発達や活動内容を共有し、援助の一貫性を高める ・職員会議や研修で、語り合い・振り返りの時間を充実させる
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の子どもの実態や各家庭の多様性を把握し、全職員が共通理解し、適切な援助を行っている	子どもの生活リズムや体調を丁寧に把握し安心して過ごせる環境が整えられている。多様な家庭環境を理解し、寄り添う姿勢が園全体で共有されている。	A	A	・学校でも、様々な想定をしておきの訓練が行われるようになってきた。子ども自身が考える訓練を積み重ねていく	・全職員が把握できるよう、工夫を凝らしていく ・外国籍家庭や支援が必要な家庭への情報伝達への配慮を徹底する
	(3)環境を通して行う教育及び保育	日々の遊びの過程や変化・面白さを見取り、次の日も「もっとやってみよう」と意欲が高まるような環境構成や教材研究を行っている	子どもの「もっと」を丁寧に見取り、次の環境作りにつなげている。子ども主体の園行事を意識してきた。園行事が子どもたちの遊びの発展につながっている。	A	A	・食育の会で学んできたことを、家庭でやってみようとする姿がみられる。園の行事の学びから、家での子どもの様子が変わってきている。とてもありがたい。時短の調理等流行っているが、園でしか経験できない食育体験を行っている	・保育教諭の教材研究不足、環境構成準備・環境の再構成が子どもの「もっと」に追いつかない日もあったことから、保育教諭の主体的な課題解決を研修に取り入れていく ・職員が防災教育の意義をしっかりと理解し、「考える訓練」が引き続きできるようにする。さらに保護者を巻き込んで様々な想定をよう、対応できる力を育てていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	子どもの居場所確認、子どもの人数確認、職員の立ち位置など、職員間での声掛けを徹底する。自身で考えて行動する防災教育を継続していく	防災教育に取り組んでいる。今までの避難訓練から「考える訓練」に変化した。職員も子どもたちも意識改革を行ってきた。	A	A		・職員が防災教育の意義をしっかりと理解し、「考える訓練」が引き続きできるようにする。さらに保護者を巻き込んで様々な想定をよう、対応できる力を育てていく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	調理栄養士等給食職員と連携し、栽培や食育活動を計画的に行う。食への興味・関心を深められるよう栽培活動を継続的にを行い、家庭へも情報提供を行っている	季節や生活に根ざした食育活動を行ってきた。栽培活動・クッキング・給食室との連携を行ってきたが、経験の積み重ねや深まりまでは至らなかった。乳児の食育への捉えを確認していく。	B	B		・栽培活動の継続性を高める仕組み作り ・学年を超えた食育・栽培活動の「見える化」 ・乳児における食育については、日々の保育の中で保育教諭が価値づけしていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	担当保育者の公開保育や個別のケース討議、少人数での活動で成長を共有するトロレーの会を行う。年間計画を見直し、学びを全職員の支援として反映させていく	「園で支える」という意識が広がり、どの職員でも対応できるよう周知が進んでいる。ケース討議やトロレーの会を通して、支援の質が向上してきた。組織的な取り組みができなかったため、研修部と同様に特別支援部も組織し、来年度はおこなってきたい。	B	B	・月の行事でも活動でも継続すること子どもたちの中に落ちていくこともある。毎年、繰り返すことが価値があること、どんなやり方を模索していくのとメリハリをつつとよい	・全園児に対する支援児の人数が多くケース討議やトロレーの会の実施について、運営上の課題があるので、解決していく ・来年度は、さらに支援児の人数が増えるので、組織的に特別支援教育が活動できるようにする
5 組織運営	(1)組織体制の充実	責任を持って各分掌に取り組み、職員間で連携を取りながら、円滑な園運営につなげている	分掌リーダーを中心に経験を生かした活動を行い、分掌外の職員とも連携して、活動が円滑に進められることが多い。職員のコミュニケーション・学びの場として、業務は各分掌に任せているが、分掌によってはうまく進められないこともあった。ミドルリーダーの育成が急務である。	B	B	・学校でもミドルリーダーの育成が急務であると感じている。組織的に小グループを作る際には、世話を焼いてくれるようなタイプやリーダータイプの人とそうでないタイプの人を1グループにするなどして、経験が積み重なるよう工夫している	・分掌ごとの「月ごとの進捗状況」を職員会議で共有し全職員が「見える」形で行っていく ・大規模園ならではの「見えにくさ」を解消するため、横断的な連携の場を増やす
6 研修	(1)研修体制の充実	職員一人一人が公開保育や園内研修での学びを日々の実践の中で活かし、重点目標の実現につなげている	研究指定園から支部拠点園として研修を進めてきた。今年度からは、子どもの育ちを教育課程で確認し、研修参加者とならいてから指導案の作成を行った。また、事後研修で話し合った事例を後日職員会議で全職員で10の姿に分析し、10の姿の捉えも学び合うことができた。	A	A		・子どもの発達を教育課程で確認する ・保育実践をまとめる力をつけ10の姿で分析し子どもの育ちを共通の指針で分析する経験を積み重ねる
7 教育・保育環境 整備	(1)教育・保育環境の充実	園内や地域の自然、資源について知識を深め、ESDを意識した教材研究を行っている	園内外のヒト・モノ・コトの環境・自然・資源を保育に問い入れていくということを再確認していく。	B	A	・登呂公園を活用してくれてありがたい。いつでも声をかけるので、新しい場所ややりたい活動があるようだったら相談してほしい	・まわりの環境を保育に取り入れるという視点をもう一度確認する ・園内外の自然や環境資源について、職員同士で考え、共有する場をもつ
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	ITCを活用し、園での様子や保育の意図、子どもの育ちを発信している。外国籍の保護者も含め、保護者有志が集まるとろフレズを開催し、保護者同士の関係作りを行っている	ITC(コドモンアプリ)による情報発信と、保護者支援・交流(とろフレズ)の2つの柱で活動を行ってきた。コドモンが導入されて2年強。コドモンネイティブの保護者が増えてきて、まだ使っていない機能を求める声も上がってきている。	A	A	・保護者もコドモンに慣れてきたので、いろいろな機能が使えるようになってきた ・また学校にも見学に行けるよう連携を取っていく。近隣の園(私立園)とも交流できるとよい。地域の公園等を活用していくとよい	・発信内容の見やすさわかりやすさの職員間の統一 ・ITC発信は、「園→家庭」になりがちなので、来年度は、保護者の声を受け取る仕組みを強化し双方向のコミュニケーションツールになるように工夫する
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣の小学校や園との交流を図り、情報交換や研修を進めている。また、子ども同士の交流の機会を作っている	職員同士の研修・参観・情報交換は行えている。小・中・高との連携の芽が育っている。他園とのつながりがもう少しあるとよい。	B	B		・地域の園との交流、小学校との交流、その他地域が求める交流といるような連携がある。来年度一歩でも交流が進むよう計画を立てていく。近隣園との交流をはじめていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	登呂公園での稲作や、近隣への散歩で自然と触れ合ったり、登呂の家訪問や楽寿会の活動に参加し、豊かな生活体験が得られるよう地域との交流を行っている	地域との交流が年間を通して計画的に行われている。登呂という地域を生かした保育が確立されつつある。乳児クラスの地域とのかわり方を今後も模索する。	A	A		・地域のヒト・モノ・コトを整理し、子どもの発達や実態に応じて交流の内容や頻度を調整する ・乳児から幼児まで一貫した「地域とのかわり」と育ちを保育に位置付ける